



Pure Core

オンライン配信 【TPAM2021フリンジ参加企画】

2021/2/4-14

<https://purecore.hokutokodama.com>

初演：2020/12/4 @THEATRE E9 KYOTO

上演時間：約75分

[キャスト・スタッフ]

出演 | 黒田健太 藤田彩佳 益田さち

振付 | 児玉北斗

照明 | 藤本隆行 (Kinsei R&D)

音楽 | 平野みどり (MimiCof)

映像 | 長良将史

音響 | 高田文尋 (株式会社ソルサウンドサービス)

舞台監督 | 河村竜也

制作 | 竹宮華美

滞在制作協力 | 太田夏来

制作アシスタント | 黒木優花

ビジュアルデザイン | 三重野龍

記録写真 | 金サジ

映像アシスタント | 笹尾愛 松本充明

About Pure Core

夜が過ぎていく。朝には扉を叩く音が聞こえる。その打撃音は、今度は、外からやって来るようだ。打撃音・・・・・・・・。

二つの打撃音・・・・・・・・四つ・・・・・・・・。

——だがそれはもしかすると、ある残余、ある夢、ある夢の断片、夜のこだまかもしれない・・・・・・・・ あの外なる演劇、外の打撃音・・・・・・・・。

ジャック・デリダ「プラトンのパルマケイアー」

やがて戦争へと向かう20世紀初頭の社会不安の中では、急激な近代化にともなう「疎外」と「排除」の経験が広がっていた。当時のモダンダンスのアーティストたちは、そのような状況に敏感に反応して、疎外された「異質な身体」を舞台上に表現(express)した。人々が肌で感じていた社会構造に起因する身体的経験が、当時のダンスには如実に反映されていたのだ。舞踊史家のラムゼイ・パートは、そのような異質な身体たち(Alien Bodies)のスペクタクルは、それを見る我々自身の恐れ、欲望そして執着の生産物として肯定しなければならないのだ、と論じている。

一方、不安を煽りたてる現代社会においてひろがる鬱々とした感情もまた、「浄化」という名目での排除を後押ししつつある。昨年、ある芸能人が薬物所持で逮捕された際に、彼女がクラブでダンスしている映像がネット上で拡散した。その動画には薬物とクラブ・カルチャー、そして彼女の踊る姿を結びつけ激しく中傷する夥しい数のコメントが寄せられたが、そこにはまさにコメントした彼ら自身の恐れ、欲望、そして執着が強固な偏見をまとめて噴出していた。それらの投稿を眺める私の脳裏には、上記のラムゼイ・パートの言葉がフラッシュバックしていた。

ダンスをめぐるこれら二つの事例は、私にとって重なり合いつつも対象的な構図を形成している。共鳴する対象としての疎外された身体と、排除の対象として卑しいもの (abject) とされた身体。だが両者を分かつ境界は、常に揺らいでいる。逸脱的なものに向けられる強い反応は、自らが社会から切断されることへの恐れを逆照射したものである。そして我々は、自ら進んで切断的に振る舞うものを排除したり、逆にそれらに共感しようとすることで、そのような恐れを誤魔化そうとしている。

薬物、ダンスの動き、音や光の刺激は意識を超えて直接的に身体へと作用し、「わたし」を連れ去ってしまいうようになる。外的な介入を受け自他の境界が錯綜したものとなることに、またそのような状態にある者を目の前にした時、我々は強い快感や恐怖を抱き反応する。対立するように思えるそれらの感情は、実は根底において未分化で交換可能なものなのだ。

本作は現代思想、舞踊史、そしてクラブ・カルチャーを参照しながら、自他の揺らぐ境界へ介入する力を考察対象として展開される。激しく感覚を揺さぶる刺激の中にたち現れる「異質な身体」のスペクタクルを前にして、我々は気づくだろう。それが驚くほど自身に似たものであることを。

児玉北斗



黒田健太 / Kenta Kuroda (出演)

愛媛/松山生まれ。路上パフォーマーとの「セッション」を通して他者の解像度を高める実践を行っている。陸上競技、ボクシングと並行して松山のDance Studio MOGAにて高校卒業までダンスを続ける。京都芸術大学（旧名称：京都造形芸術大学）入学後に多彩な作家や教授との交流、“MuDA”にてパフォーマーとして瀬戸内国際芸術祭をはじめとする公演への参加、また自身が主催する“感覚絶叫計画”にて『Reboot a stain』（2016）、『垂るる空』（2017）の舞台作品をそれぞれ発表する中で次第にダンスへと傾倒する。大学卒業後2018年夏よりNYへ留学後、日本に帰国する。現在は“HiXTO”（ヒクト）と協働し活動する。また“現代表現活動グルーヴ”にて檜皮一彦と共にWSや作品制作を行う。



藤田彩佳 / Ayaka Fujita (出演)

5歳よりバレエを始める。法村友井バレエ学校で法村牧緒らに師事。高校卒業後にスイスのルードラベジャールバレエ学校に入学しクラシックバレエや、グラハムテクニックをミシェルガスカールらに師事。卒業後ポルトガルのkale companhia de dancaに入団。Noism準メンバーとして在籍し、現在関西を拠点に活動。2020年2月、ジゼル・ヴィエンヌ作品『ショールーム・ダミーズ』出演。



益田さち / Sachi Masuda (出演)

幼少より真萩浜田バレエ団にて踊り始める。近年はakakilike、きたまり/KIKIKIKIKIKI、schatzkammer、高野裕子、多田淳之介、やなぎみわなどによる作品に出演する他、ショーケースなどで自作の発表も行う。2015年夏、ダンサー斉藤綾子とのダンスユニット…1[アマリイチ]を結成、活動を開始。

以上写真3点：© igaki photo studio
提供：城崎国際アートセンター（豊岡市）



藤本隆行 / Kinsei R&D (照明)

アーティスト/照明家。1980年代後半からDUMB TYPEに参加し、主に照明やテクニカル・マネージメントを担当。21世紀以降、LED照明を使った自らの舞台作品、『true/本当のこと』『Node/砂漠の老人』『SeeingRed/赤を見る』『T/IT: 不寛容について』等上演。国内外のアーティストとのコラボレーションも活発に行い、2010年から大阪の山本能楽堂にて能の演目LED照明を付ける試みを続けている他、16年春には市原湖畔美術館でボイスアーティストおおかた静流との共作『くらやみ美術館』を発表。韓国国立現代舞踊団の演目や、野村萬斎の『FORM』、Perfumeのコンサート『Reframe』等にも照明で参加。児玉北斗とは、『光線には色はついていない』（Kinsei R&Dプロダクション、19年12月京都初演）にて、コラボレーションしている。その仕事はデジタル技術を積極的に舞台や美術作品に援用し、身体とテクノロジーが確かな相互作用を結ぶことで、より解像度と強度の高い経験を観客に提示することをめざしている。



平野みどり / Midori Hirano (音楽)

京都府出身、現在ドイツ/ベルリン在住の音楽家。幼少時のピアノ教育によって獲得された音感を生かしながら、弦楽器などのアコースティック楽器に加えて電子音やフィールドレコーディング、サンプリング音などを自在に操る多彩な音楽を生み出している。デジタルとアコースティックサウンドを絶妙なバランスでミックス、突出した作曲力を持つアーティスト。自身の作品以外にも広告作品や演劇、ショートフィルム、エキシビションの音楽も手がけており、過去に楽曲提供をした映像作品はベルリン映画祭、サウス・バイ・サウスウエスト映画祭、アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭などで上映されている。電子音響的なアプローチ且つクラブフロア向けの作品を発表しているMimiCof名義およびコラボレーション作品も合わせて計11枚のアルバムを現在までに発表している。



児玉北斗 / Hokuto Kodama (振付)

2001年より、ヨーテポリオペラ・ダンスカンパニーなどカナダ、スウェーデンのダンスカンパニーで活動。マッツ・エック、アレクサンダー・エックマン、ヴィム・ヴァンデケーブスなどの創作にて主要な役を務めた。2017年にトーキョーワンダーサイト本郷で初のソロ公演「Trace(s)」を発表するなど、主体・身体・権力とコレオグラフィーの連関について、当事者的な問題意識を基盤とした作品を制作している。2018年ストックホルム芸術大学修了、芸術学修士(振付)。現在は京都を拠点として研究・舞踊活動に取り組む。www.hokutokodama.com

[参考文献]

Ramsay Burt, *Alien Bodies: Representations of Modernity, 'Race' and Nation in Early Modern Dance*, Routledge: London and New York, 1998.

千葉雅也「〈享楽〉を守るために、法のクリエイティブな誤読を」、『踊ってはいけない国、日本——風営法問題と過剰規制される社会——』（磯部涼・編著）、2012年、河出書房新社、204-215頁。

マキシム・クロンプ『ゾンビの小哲学——ホラーを通していかに思考するか——』（武田宙也、福田安佐子・訳）、2019年、人文書院。

ジャック・デリダ「プラトンのパルマケイアー」、『散種』（藤本一勇、立花史、郷原佳以・訳）、2013年、法政大学出版局。

ジル・ドゥルーズ「麻薬に関する二つの問題」、『狂人の二つの体制 1975-1982』（宇野 邦一・監修、江川 隆 男 他・訳）、2004年、河出書房新社、211-216頁。

マーク・フィッシャー『資本主義リアリズム』（セバスチャン・プロイ、河南瑠莉・訳）、2018年、堀之内出版。

マーク・フィッシャー『わが人生の幽霊たち——うつ病、憑在論、失われた未来——』（五井健太郎・訳）、2019年、Pヴァイン。

ミシェル・オートフィユ、ダン・ヴァレア『合成ドラッグ』（奥田潤、奥田陸子・訳）、2004年、白水社。

國分功一郎『中動態の世界——意志と責任の考古学——』、2017年、医学書院。

Felicia McCarren, *Dance Pathologies: Performance, Poetics, Medicine*, Stanford University Press: Stanford, 1998.

貫成人『フーコー——主体という夢：生の権力——』、2007年、青灯社。

山田陽一『響き合う身体——音楽・グルーヴ・憑依——』、2017年、春秋社。

[映画]

ギヤスパー・ノエ『エンター・ザ・ボイド』2009年。

[図録]

Pamela Rosenkrantz, *No Core*, JRP | Ringier: Zurich, 2012.

[ウェブサイト]

児玉北斗・編『ダンスをめぐる12の文章』<https://writings.hokutokodama.com>

[本作に関するお問合せ先]

WEB: <https://purecore.hokutokodama.com>

MAIL: purecore.dance@gmail.com